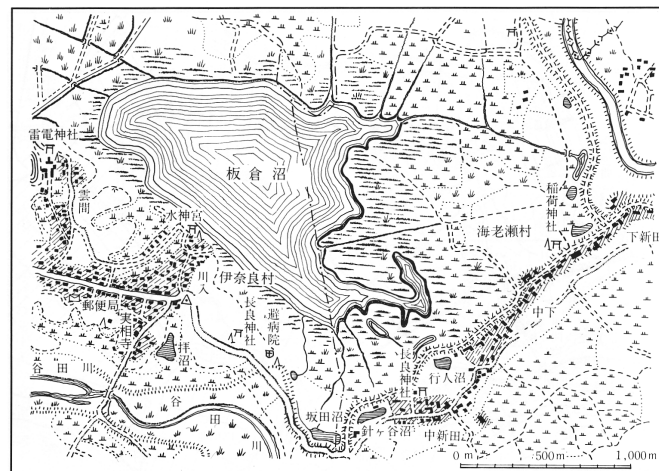


上野国 の 歌 (3) 下野国・常陸国の歌 (1)

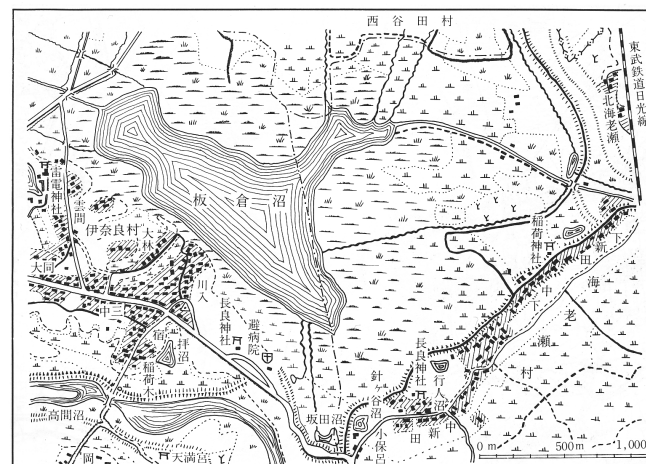
北川和秀

【伊奈良の沼】

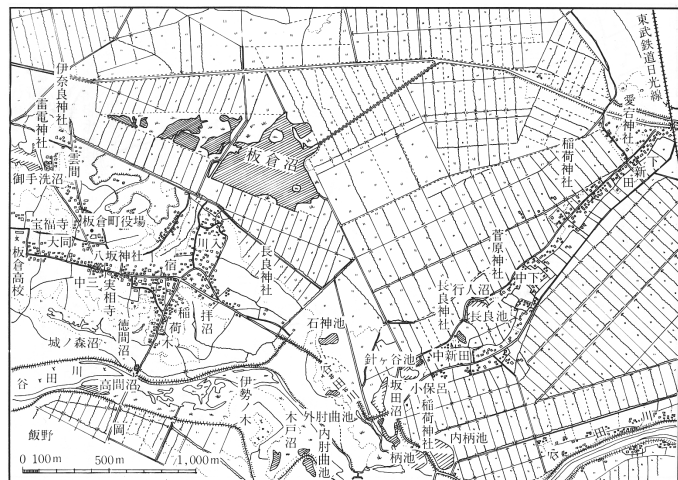
○上毛野伊奈良の沼の大藪草外に見しよは今こそ益れまき(三四一七) 上野東歌



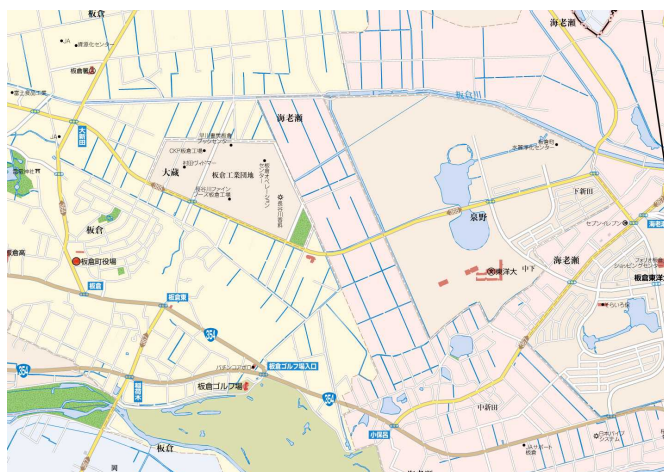
明治 43 年



昭和 9 年



昭和 38 年



現 代

【かほやが沼】

○上毛野可保夜が沼のいはる蔓引かばぬれつつ吾をな絶えそね（三四一六）上野東歌

《参考》

a 入間路の大家が原のいはる蔓引かばぬる吾にな絶えそね（三三七八）武蔵東歌
 b 西の方はるかに川嶋と聞えて、こゝにも甲波すくねの社を見やりたるは、これなん
 光明院がつかさどれるなりけり。うのとしのわざはひに、其地さへながれうせて、
 その社は南の方三四町ばかりひきしりぞきて作りたてたとぞ。……名に高きかほ
 やが沼も、むかしこの境内に有けるを、近き頃となりては俤すらなくなりしうへ、
 また其地さへぞうせはてたる。（奈佐勝皐『山吹日記』天明六年785五月十三日条）
 ＊「うのとしのわざはひ」は天明三年の浅間山の大噴火によってもたらされた災害



【上野国防人歌】

①難波道を行きて来までと吾妹子が着けし紐が緒絶えにけるかも（四四〇四）

右の一首は、助丁上毛野牛甘のなり。

②わが妹子がしぬひにせよと着けし紐糸になるとも吾は解かじとよ（四四〇五）

右の一首は、朝倉益人のなり。

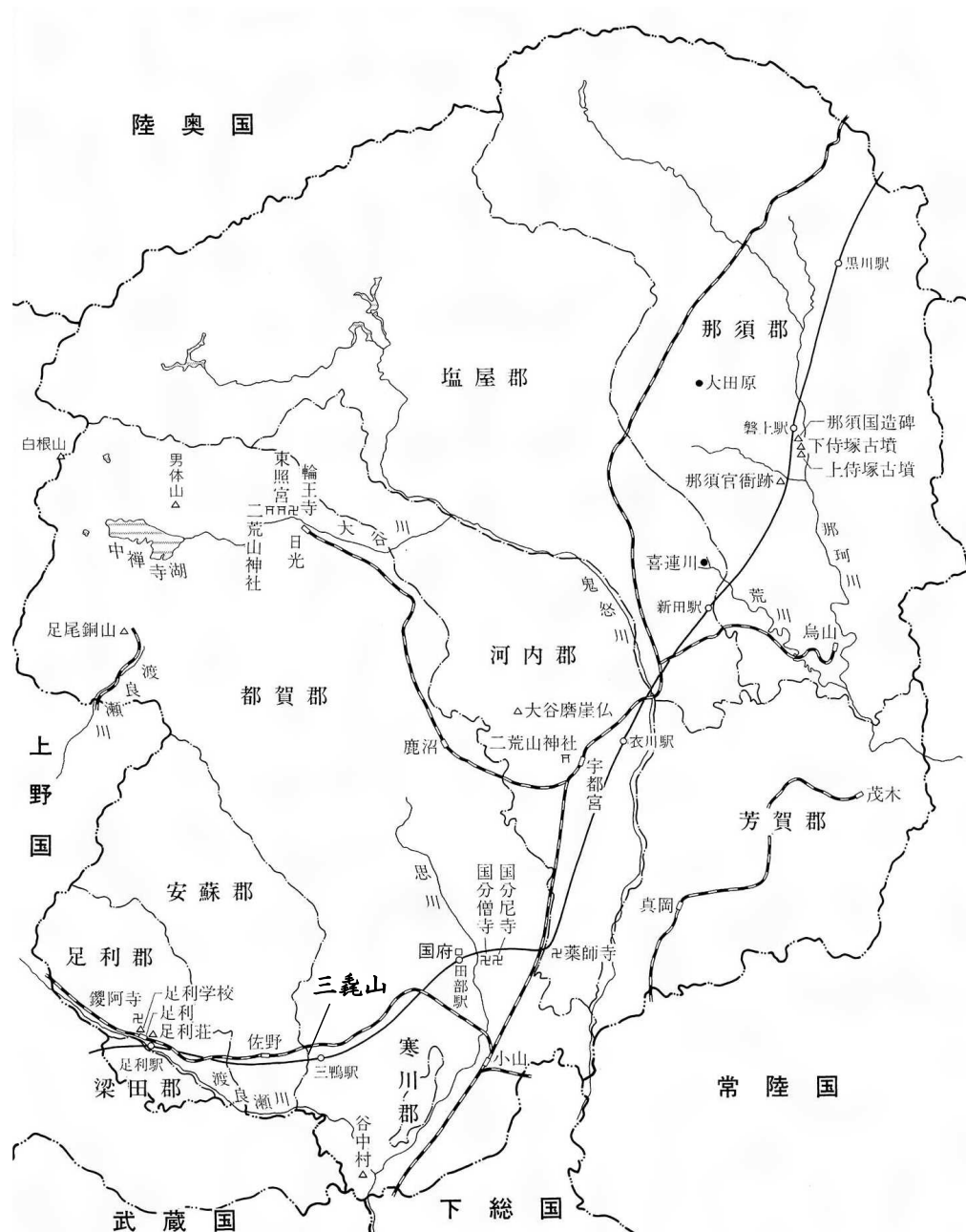
③わが家ろに行かも人もが草枕旅は苦しと告げ遣らまくも（四四〇六）

右の一首は、大伴部節麻呂のなり。

②ひな曇り碓氷の坂を越えしだに妹が恋しく忘れぬかも（四四〇七）【碓氷】に既出

右の一首は、他田部子磐前のなり。

◎下野（今の栃木県）



【三毛山】（佐野市と下都賀郡岩舟町との境）

○ 下毛野美可母の山の小櫓のすま麗し児ろは誰が笥か持たむ（一四・三四二四）

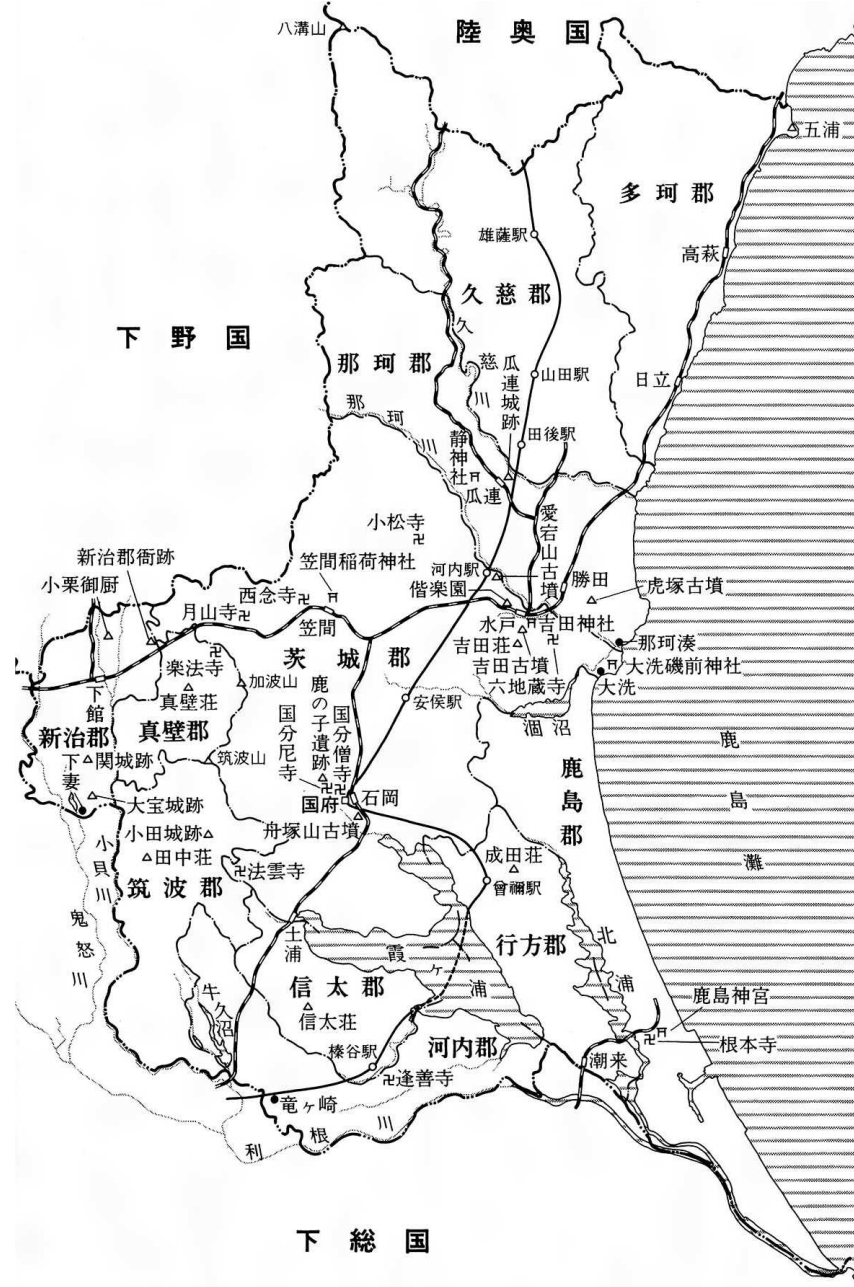
【安蘇】（佐野市）

○ 下毛野安蘇の河原よ石踏まず空ゆと来ぬよ汝が心告れ（一四・三四二五）

【防人歌】

- ① 今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯と出で立つわれは（二〇・四三七三）
- ② 天地の神を祈りて征箭貫き筑紫の島をさして行くわれは（四三七四）
- ③ 旅行に行くと知らずて母父に言申さずて今ぞ悔しけ（四三七六）
- ④ 母刀自も玉にもがもや頂きて角髪のなかにあへ纏かまくも（四三七七）
- ⑤ 難波津を傍ぎ出て見れば神さぶる生駒高嶺に雲そたなびく（四三八〇）
- ⑥ 津の国の海のなぎさに船装ひ発し出も時に母が目もがも（四三八三）

◎常陸（今の茨城県）



【常陸国】

○常陸さし行かむ雁もが吾が恋を記して付けて妹に知らせむ（二〇・四三六六）
 右の二首（そのうち一首）は、信太郡の物部道足のなり。

【筑波】（筑波郡）

筑波岳に登りて、丹比真人国人の作る歌一首 短歌を并せたり
 ①鶏が鳴く 東の国に 高山は 多にあれども 朋神の 貴き山の 並み立ちの 見が
 欲し山と 神代より 人の言ひ継ぎ 国見する 筑羽の山を 冬ごもり 時じき時と
 見ずて行かば まして恋しみ 雪消する 山道すらを なづみぞわが来る（三・三八二）

反歌

②筑羽嶺を外のみ見つつありかねて雪消の道をなづみ来るかも（三八三）

検税使大伴卿の、筑波山に登りし時の歌一首 短歌を并せたり

③衣手 常陸の国 二並ぶ 筑波の山を 見まく欲り 君来ませりと 熱けくに 汗か
 きなげ 木の根取り 嘯き登り 峯の上を 君に見すれば 男の神も 許し賜ひ 女
 の神も 幸ひ給ひて 時となく 雲居雨降る 筑波嶺を 清に照らして いふかりし
 国のまほらを 委曲に 示し賜へば 歎しみと 紐の緒解きて 家の如 解けてそ遊ぶ

うち靡^{なび}く 春見ましゆは 夏草の 茂くはあれど 今日の楽しさ（九・一七五三）

反歌

④ 今日の日にかにか及^しかむ筑波嶺に昔の人の来^きけむその日も（一七五四）

筑波嶺に登りて嬬^か歌^が会^ひをする日に作る歌一首 短歌を并せたり

⑤ 驚^{おどろ}の住む 筑波の山の 裳^も羽^は服^き津^つの その津の上に 率^{あども}ひて 未^を通^と女^め壮^を士^との 行^うき集^{つど}
ひ かがふ嬬^か歌^がに 人妻^{ひとめ}に 吾^あも交^まはらむ あが妻^{つま}に 他^{ひと}も言^{こと}問^とへ この山^{やま}を 領^{うしは}く
神^{かみ}の 昔^{むかし}より 禁^{いさ}めぬ行^わ事^ざぞ 今日^{けふ}のみは めぐしもな見^みそ 言^{こと}も咎^{とが}むな 嬬^か歌^がは東^{あづま}の俗^{しやく}語^ご
に賀^か我^が比^ひと日^ひふ（九・一七五九）

反歌

⑥ 男^{おとこ}の神^{かみ}に雲^{くも}立^たちのぼり時^し雨^{ぐれ}ふり濡^ぬれ通^とるともわれ帰^{かへ}らめや（一七六〇）

右の件の歌は、高橋連虫麻呂の歌集の中に出づ。